

# 海外農業開発

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NEWS

1999 1,2

社団法人 海外農業開発協会

## FOODEX JAPAN '99 及びアグリビジネスセミナーのお知らせ

毎年恒例の FOODEX JAPAN が、今年も 3 月 9 日～12 日の 4 日間、千葉の幕張メッセで開催される予定で、チリからは食品関連機関及び企業が参加の予定です。

尚、今回は FOODEX JAPAN の会期中に日本の皆様にチリの高品質で、健康的なチリの産品を知っていただくために、チリアグリビジネスセミナーを次の要綱で開催いたしたくお知らせいたします。

### プログラム

紹介 JETRO 農水産部長 三宅 均  
JETRO 名古屋所長 神谷 親典

挨拶 オスカル・フェンデス チリ共和国大使

- テーマ ・チリ経済と農牧畜部門の展望  
チリ農業省農業次官 ジャン・ジャック・デュハルト  
・農牧畜資源保護における SAG (チリ農業省農牧局) の役割  
アジア太平洋輸出審査官 ミゲル・フェンデス  
・来る 21 世紀を迎え、チリ果物が占める位置  
チリフルーツ輸出協会 (ASOEX) マーケティング部長  
ホセ・アントニオ・クビージョ  
チリフルーツ生産者連合 (FEDEFruta)  
ルイス・シュミット  
・チリワイン：ニューワールドワイン  
Corpora Vineyards & Winery アジア太平洋マーケティング部長  
アレクシス・フエンテアルバ  
・チリアグロインダストリー輸出の進展  
チリ農産加工品生産者連合 (FEPACH) 会長  
クリストバル・バルデス  
・チリにおけるアグロインダストリー、漁業、養殖部門のビジネスチャンス  
チリ財団理事長 エドアルド・ビトラン  
・質疑応答

※各スピーチは 15 分間の予定で日西の同時通訳がはいります。当日のスピーチの内容は変更される可能性があります。

### 東京会場

場所 ホテルニューオータニ幕張  
日時 3 月 11 日 (木)  
セミナー 15:00～17:30 2 階 鶴の間  
レプション 17:30～18:00 2 階 翠鳳

### 名古屋会場

場所 ヒルトン名古屋  
日時 3 月 15 日 (月)  
セミナー 9:30～12:00 5 階 銀扇  
レプション 12:00～13:30 5 階 金扇  
商談会 13:30～17:00

信頼できるビジネスパートナー、チリと新しい商売を考えていらっしゃる方々にはまたと無いチャンスです。いろいろな質問を用意してぜひご参加ください。

詳しくは商務部までお問い合わせください。

チリ政府貿易振興局・チリ大使館商務部：Tel.03-3769-0551 Fax.03-3769-4156



1999-1, 2

半世紀を

振り返って

私の海外見聞録(上) ..... 1

黄塵万里

中国北部地域の農畜業を食す .....10

「海外農林業開発協力促進事業」制度のご案内 .....21

半世紀を  
振り返って

私の海外見聞録(上)

会長 小倉 武一

財団法人 食料・農業政策研究センター

き受けた次第である

「海外農業開発協会」理事、私の数年後輩の農林省(OB)が関係資料を探しだしてくれるというので、執筆を引四巻に収録)のなかから選びだすのは一苦労である。さいわい私に本稿執筆をすすめてくれた大戸元長君(現なかに収録してきているが、それでも古い記述をおびただしい数の著作(小倉武一著作集)、農文協発行、全十長い期間の出来事となると、記憶が薄らいでしまっているものもある。私は外遊の都度、見聞を綴って著作物の本誌からそのうちのいくつかの国についての見聞や印象を書いてもらいたいと依頼されたが、半世紀にわたるたし、また、同じ国を何度も訪れているので正確には数えられない。

私のこれまで外遊した国の数は七十カ国近くに及ぶが、旅行回数となると一回に数カ国をまわることも多かつ

これまでの多数の外遊と国内での本職との関係は一樣でない。最初の職場であった農林省（現「農林水産省」）在職中（1934年から27年間）の外遊は公務が主であり、同省での最後の外国出張はドイツやフランスなどヨーロッパ諸国への農業視察だった。この視察は農業基本法立案の参考にすることを目的にしていた。

退官後はいろいろな役職についたが、海外に直接つながる職場はアジア経済研究所（略称「アジ研」、1998年7月1日より「日本貿易振興会アジア経済研究所」）であった。最初は東畑精一先生に招かれて理事として入所し、後に先生を引き継ぐかたちで所長、会長をつとめ、ほぼ10年在職した。

アジ研の在職中には、アジアのみならず、中東、ヨーロッパ、アフリカ、中南米に足を運んだ。アジ研は創設当初、その名が示すとおりアジア諸国を対象としていたが、年月の経過とともに世界中の途上国を対象とするまで範囲を拡大し、英語では「Institute of Developing Economies」（開発途上経済研究所）と称するようになった。1975年にアジ研会長を辞任した後は日銀の政策委員に就任した。

日銀政策委員の定数は7人（うち1人は日銀総裁）で、私も日銀内に立派な部屋をもらい常勤し、2期8年間つとめた。

この職は前任の東畑四郎さんから引き継いだのだが、アジ研では東畑精一先生、日銀ではご舎弟の四郎さんの後任という因縁であった。四郎さんは農林省の先輩で、同省でも彼のポストを引き継いだこともあったが、ここでもまたそういう巡り合わせになったのである。余談になるが精一先生は姓を「トウバタ」と称しておられたのに対し、四郎さんは「トウハタ」と名乗られていたので、私もそう使い分けていた。違う理由を知ったのはお二人が亡くなられてからであった。精一先生のご息女、東畑朝子博士（フードドクター）から聞いたところ、東畑家は「トウハタ」が正しいのだが、「TOHATA」とローマ字で書くトラテン語系の人には「H」の発音が難しいので、先生は「TOBATA」と濁音にされたという。

精一、四郎ご兄弟は郷里の祖先伝来の墓のほか、鎌倉の東慶寺に分骨して葬られている。この墓は精一先生が四郎さんに先立たれたのを機に建てられたもので、墓石には「昭和55年（1980年）11月3日精一文化勲章受賞の日に建之」と刻まれている。墓標に西暦を入れるのは従来の慣習にてらして珍しいことだが、このようなところにも先生の国際性が現われているといえよう。

さて、私の日銀勤務は前述したように8年に及んだが、日銀内の部屋はすこぶる快適で、委員の本務である金融政策のほかにも広く勉強することができた。「Can Japanese Agriculture Survive?（日本農業は生き残れるか?）」と題する850頁の大冊を英語で書いたのも主としてこの部屋であった。

この本は農政研究センター（正式名称は財団法人「食料・農業政策研究センター」）が発刊し、1979年の初版以来第3版を重ねている。題名が示すように日本農業についての記述だが、外国の事例も引き合いに出していることと、訪れた国々で撮ったり、もらったりした写真を掲載しているので、本稿執筆のための記憶を呼び戻す上では大いに役立った。

なお、私は日銀政策委員に就任する前年（1974年）に、それ以前から委員の一人であった政府税制調査会（略称「税調」）の会長に互選され、ここでも東畑先生の後任として、16年にわたり会長を務めた。この任務に使う時間は、マスコミに取り上げられる割合ほどには多くなかった。

今年の秋に89歳をむかえる私のこれまでの人生を振り返ると、読む、書く、旅することを生き甲斐としていたようである。

## 第1部 アジア

(戦前)

### 仏領インドシナ駐在

私の最初の海外経験は農林省へ入省してから4年目の1938年に陸軍に召集され、ほぼ2年間、兵隊として中国大陆を転々としたときにはじまる。この間に各地の農業や農民の生活を見る機会はあったが、それを調査したり記録したりする余裕は一介の兵士にはなかった。

召集解除後は農林省に復帰したが、翌年には外務省に出向、仏領インドシナのフランス総督府の所在地であるハノイに派遣され、新設の「仏領印度支那大使府」にはぼ1年間駐在した。

フランスとの外交機関はパリにある大使館であったが、この仏印大使府は仏領インドシナのフランス総督府との交渉に当る外交ミッションという特殊な役割をもち、ミッションの長は特命全権大使の芳沢謙吉氏だった。そのころはすでに日本軍が仏印に進駐している準戦時状態にあり、団員はすべて単身赴任であった。

大使府は政務、経済、情報の3部に分かれ、私が所属した経済部の部長は大蔵省から、部員は大蔵、商工、農林、通信、拓務各省からの出向者の混成であった。私の仕事は米の買付け協定に関するもので、総督府との交渉責任者は経済部長が担い、私は部長に随行していた。交渉の用語はもちろんフランス語なので通訳を介しての会談となるが、私は旧制第三高等学校のときにフランス語を第一外国語とするクラス(文科両類)で学んだので、文書の解読ができ助かった。今日のベトナムではフランス語はほとんど通じないそうだが、それは日本の植民地であった朝鮮半島、台湾地域で世代の交代が進み、日本語が通じなくなってきたのと同様なのであろう。私の息子のうち外交官の道を選んだ長男の和夫は、数年前まで駐ベトナム大使をつとめていたが(現在は韓国大使)、そのさいの交渉はすべて英語で行われたという。また、英語は南部ベトナムではかなり通じるようだが、北部では余り普及していないようだ。

さて、話を本筋に戻す。米の輸入についての政府間交渉はハノイで行われたが、当時の仏印米の生産は、現在のベトナムと同様に南部のデルタ地帯が多くを占め、取り引きの中心はサイゴン(現ホーチミン市)であった。米の流通は華僑が握っており、日本側の買付け、輸送は三井物産が担当。当地には同社の支店があり、また、農林省(食糧管理局)の職員も駐在していた。

私は米の生産、流通の実情を視察するため、現在のカンボジア領も含めたデルタ地帯、さら

に脚を伸ばしてアンコールワットの遺跡を見物し、サイゴンの三井物産支店を訪れていたときに真珠湾攻撃を知った。

石炭輸送船に便乗しての私の帰国は、1941年12月の開戦の翌年の暮れ近くであったが、既に敵潜水艦が日本の近海に出没するようになっていたので、ヒヤヒヤしながらの航海となった。

戦前には、この大使府のように各省から外務省に身分を移して在外勤務をするのは珍しく、各省が海外に駐在官を派遣するのが普通であった。大蔵省がロンドンとニューヨークに財務官事務所を置き、農林省が世界の米の情報の中心であったロンドンに駐在官を、また、ニューヨークに蚕糸局直属の海外生糸調査事務所を持っていたのはその例である。

このような制度は終戦後の吉田内閣の時代になくなった。「外交一元化」というスローガンの下で、各省からの海外駐在官、出先機関はすべて大使館に吸収され、各省の職員は外務省に身分を移して、大使館職員という形でそれぞれの分野を担当することになった。例えば従前の財務官は大使の下での財務公使というように。省庁からの派遣者（アタッシェ）の身分には公使、参事官、書記官などがあるが、農水省からこのような形で出ている農務官（agricultural attache）は1998年8月現在82名である。ほかに、FAO等の国際機関等へ休職扱いで出向している者を加えれば、今日、在外勤務経験者はかなりの数にのぼろう。これら在外経験者の国際感覚と語学力を有効に活かす農水省の人事管理が望まれる。

#### （戦後）

戦前の仏印勤務から話が外れたが、本筋に戻って戦後に歴訪したアジアの国々のうち主なものを以下に取り上げる。

#### 台湾

日本の領土であった台湾には行ったことがあるが、戦後の台湾を最初に訪れたのは1966年であった。当時の台湾は、国共内戦（国民党と共産党による戦い）に破れて台湾に移った国民党政権（蒋介石政権）によって統治されており、1949年に大陸に誕生した中華人民共和国（毛沢東政権）とは互いに相手の存在を認めない臨戦状態にあった。

中華民国政府は、台湾に移ってからも中国全土に主権をもつと建て前から、台湾を中華民国の一つの省と位置づけ、中央政府を台北に、省政府を台中（当時の公式名称は「中興新村」）に置いていた。

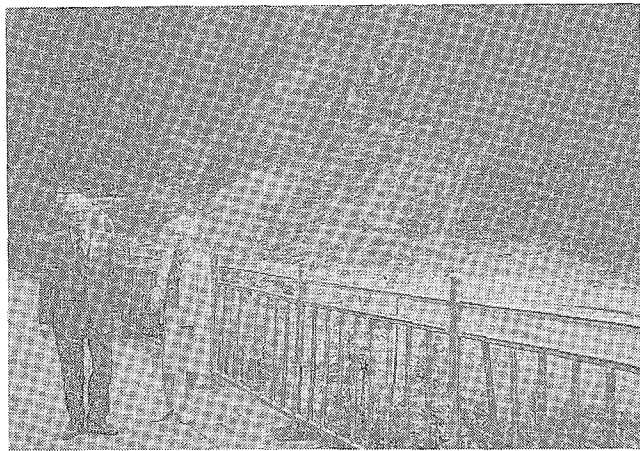
私はまず台北で中央政府の經濟部、農事試験場、台湾大学を訪れた。台湾大学というまでもなく旧台北帝国大学の後身であるが、日本統治時代の建造物がそのまま使われており、堂々たる偉風である。教育、研究面での力量も旧帝国大学に劣らぬようであった。台湾の中部西海岸寄りに位置する台中（中興新村）へは、台北から“観光号”と名づけられた快適な汽車で行き、省立「中興大学」農学部を訪れた（現在は国立）。

この大学は日本統治時代の高等農林学校をベースに農業大学、総合大学へと改組してきたもので、日本語のできる教授から大学の現状についての説明を受けた。農学部の教授陣の出身大学を聞いたところ、「農学」では戦前の旧帝国大学の卒業生が多く、農業経済の方は若手のア

メリカ留学組みが中心になっているとのことであった。

続いて訪れた農事試験場では多毛作（四毛作）の研究の話を聴いた。1960年代半ばごろの台湾農業は、強力なアメリカ援助を受けて順調な発展をしていた。このアメリカの農業援助は、その計画や実施方法を中国農村復興聯合委員会（通称、農復会あるいはJCRR：アメリカ側2名、中国側3名の委員で構成）の全会一致により決められるという特異な援助方式であった。この点は、占領下でアメリカ方式を押しつけられた日本と異なる。例えば、戦時中に当時の農会（普及事業団体）と産業組合（経済団体）を合体して作られた農業会は、日本では分離・解体（普及事業は国と県との共同事業になる）されたが、台湾ではJCRRの建議に基づき、両機能を持つ農会（省、県、郷鎮の3段階）として存続している。

上述の台湾旅行の後、私は何回か同地を訪れたが、最近の訪台は一昨年（1997年）に妻、娘、孫に伴われての家族旅行であった。今回はこれまで行かなかった東海岸へも足を運んだ。この地域では現在もかなり日本語が通じる。それは台湾東部地域の主要住民であった山地人（日本の領台時代には“高砂族”と呼ばれ、今では“山地同胞”と呼ばれている）は、部族ごとに言葉が違っていたので、共通語としての日本語が日常語となっていたことによる。一泊した花蓮市は山地族のうちのアミ族が多いとのことである。花蓮市から車で北に約1時間の太魯閣（タロコ）は大理石が渓谷の流れに浸蝕されてできた見事な景観である。



大魯閣入り口付近での筆者夫婦

## 21 中国

前述したように、私は戦前に兵隊として中国本土を歩きまわったが、戦後は1973年5月に10日間の日程で訪れたのが最初である。このときはアジア農業技術交流協会のグループ旅行の一員として、人民公社を視察するのが主な目的であった。私はこの旅行に出かける以前から、共産主義中国の農業についてはおびただしい数の資料、文献を読み、そのうちのいくつかについ



ては文献解題も書いていたが、百聞は一見に如かず<sup>ダイサイ</sup>と思って参加したわけである。

訪れた二つの人民公社のうちの一つは“農業は大寨に学ぼう”（中国語では「学大寨」）というスローガンで日本にまで知られていた人民公社である。大寨は山西省の東部、太行山脈の虎頭山（海拔1,100m）の西麓に位置する地名だが、視察したのは同公社に21ある生産大隊の一つで、スローガンが指すところの大隊であった。

宿泊した県営の施設「大寨接站」で味わった朝食のアワ粥のうまかったことは今でも忘れない。当時の大寨は見学者のための施設や案内サービスも行き届き、訪れた県営の大寨展覽館の参観者は月1万人を超えるという説明であった。

大寨生産大隊は戸数83戸、人口440人、労働力165人で、労働力の約60%は耕地造成、圃場整備など農業基盤に投入されると聞いた。当地域の集団住宅地を歩いて見たが、東南アジアでよく経験するように子供たちがぞろぞろついて来たり、取り囲んだりするといった事態にはなかった。インドなどに多い大人や老人が家の前にボンヤリと立ち続けたり、座り込んでいる光景にも接しなかった。これは大寨だけでなく、他の人民公社でも同様であった。

### 3.1 インドネシア

1973年に20日ほどの日程でインドネシアのジャワ島と、その北に隣接するスマトラ島を旅行した。ジャワ島ではジャカルタとそこから車で1時間ほどのところにあるボゴールに宿泊した。ボゴール所在の中央農業試験場では、日本の技術協力専門家たちにも会ったが、日本政府が提供した実験設備が目立っていたのが印象に残る。ボゴールには農科大学もあり、かつての宗主国オランダのワーゲニンゲンの町を思い起こさせる。

また、広さ87ヘクタールに及ぶボゴール植物園はオランダ統治時代にはバイテンゾルフ植物園と呼ばれ、熱帯植物の宝庫として世界に知られた植物園である。収集植物は1万5,000種にも及ぶという。1848年にアフリカから移植されたオイルパーム（油やし）が亭々と聳えているのが印象に残るが、これが現在インドネシアやマレーシアのオイルパームの母本になったそうである。ボゴール視察の夜は車で1時間ばかり登ったブンチャック（峠）のホテルに泊った。高地なので夜は暖炉に火を入れる。ジャワ島は熱帯地だが、高冷地は避暑地としての利用のほか、温帯野菜・果実の栽培を行っている。ここからバンドンまでのドライブの途中では、チヘアを中心とした農村振興計画の一環としての米増産をはかる技術協力チームの専門家たちに会った。

東部ジャワでは上記の西部ジャワ食糧（主として米）増産のプロジェクトとならぶ日本の農業協力であるメイズ増産プロジェクトをみた。このプロジェクトは通産省の一次産品開発協力事業であったが、結果はこの地域のメイズを増産させたものの、生産されたすべてのメイズが現地の食料として消費され、輸出に充てられなかったので開発輸入には至らなかった。

ここでは、味の素社の生産工場をみせてもらった。同社は世界中に生産工場をもっているが、原料はそれぞれの立地に応じて異なる。東部ジャワと中部ジャワはオランダ統治時代からの甘蔗糖の主産地であるので、甘蔗糖の副産物である糖蜜を原料としていた。

ジャワ島に隣接するスマトラ島では、まず南端のランポン州で日本商社（三井物産、三菱商事、伊藤忠商事）が進めている農場を視察した。この3社の農場の動向は、当時、日本のマスコミに賑々しく報道されていた。三井の農場（現地名「ミツゴロ」）、伊藤忠の農場（同「ダヤ・イトウ」）はともにメイズを主作とし、三菱の農場（同「パゴ」）はヒマを主作としていた。



ジャワ島空中写真  
濃色部分はココやしのエステート  
淡色部分は農民による稲作地

これら 3 農場は当初の事業計画に反して赤字が累積したため、1983年から84年にかけて相次いで撤退した。

北部スマトラでは、いくつかの国有・国営農園を視察した。周知のように、インドネシアの農業は、農民農業と農園農業（エステートまたはプランテーション農業と呼ばれる）とからなる典型的な植民地的二重構造になっている。エステートには国有・国営と民営の 2 種類があって、前者はインドネシア独立後に政府がオランダ人所有のエステートを接収（無償没収）したものである。国営エステートは全国で20余りあって、北から一連の番号をつけ、その名称としている。私がまず訪れたのは国営第 1 エステートであった。そこは北部スマトラの中心都市メダンの西北約18キロに位置し、13万5,000ヘクタールに及ぶ広大な面積をもち、松（松脂採取）、ゴム、オイルパームを主作物としていた。従業員はスタッフが80人、労務者が4,200人で、エステート内には全従業員の住居および売店、診療所、学校などが設けられ、外部とは全く別の社会を形成していた。

次に訪れた国営第 3 号エステートはゴム農園であったが、将来その半分をオイルパームに切り替える計画と聞いた。第 6 号はオイルパームを主作にしていた。エステート内にはパーム油の特徴として、採果後すぐに搾油せねば品質が落ちるということで、搾油工場を併設していたが、オイルパーム農園であれば当エステートでなくても搾油工場をもっている。この農園は 3 万ヘクタール強の面積で、スタッフ20名、搾油工場労働者を含む労務者は1,600名であった。

私がこれらの国営エステートをみた1970年代前半は、インドネシアのエステート農業の転換の初期であったようで、それ以後はゴムからオイルパームへの切り替えが急速に進んだ。これは言うまでもなく、人造ゴムとの競争による天然ゴムの世界的な需要減と、世界の油脂消費の増大に対応した結果である。特に近年では国内の民間資本および諸外国からの民間投資によるオイルパームエステートが急増している。ちなみに同国のパーム油生産はマレーシアに次いで世界第 2 位の座にある。

## タイ

最初にタイの土を踏んだのは1966年4月だが、それもバンコクにほんの2～3日立ち寄っただけである。到着の翌日は日曜だったので、旧知の山下貢、野中耕一両君の案内で農村ドライブを楽しんだ。山下君は農林省 OB でエカフェ（ECAFE：現在の ESCAP の前身）の農業部長の職にあり、野中君はアジア経済研究所からタイに派遣されていた職員であった。同君は東大で農業経済を学び（東畑精一先生の弟子）、卒業後すぐにアジ研に入所して以来、同所の理事を経て数年前に退職するまでタイの研究を続けてきた。タイ語にも堪能で、彼が翻訳した数多いタイの農民小説は、なまじのレポートや論説よりも同国の農村・農民の実情を知るのに役立つ。

さて、その数日後は、たまたま「起耕日」という祭日で、私は農業省に招かれて国王主催の起耕式典に臨み興味深い稲作行事を眼にすることができた。

2度目にタイを訪れたのは、それから8年後の1974年である。そのときはバングラデシュ往復の途中で立ち寄り、バンコクのほか北部や東北部も視察した。

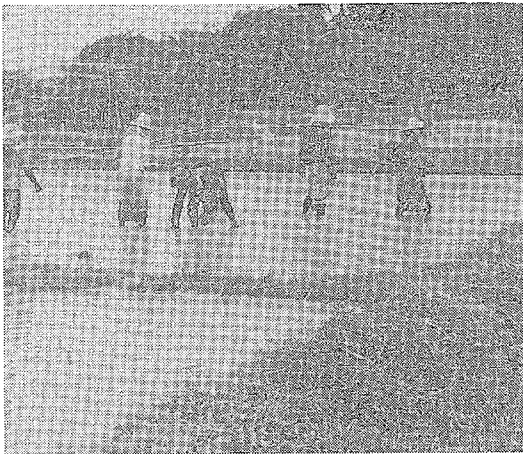
バンコクではFAO 専門家として勤務していた高橋治助、松尾英俊両博士をはじめ、熱研研究員とその他の農業関係日本人諸氏の話をお聴くことができた。最古参の高橋博士は農林省（試験場）出身の米作の権威で、タイでは「米の神様」として尊敬されていた。なお、同氏はその後、FAO を定年で退職されたが、タイ政府の強い要請で日本の技術協力専門家として同じ仕事を継続され、通算10数年をタイの米作に尽くされた。農民と直接話しができるようにタイ語をマスターし、タイの浪曲を長々と演ずるまでになったそうである。

北部への旅はバンコク駐在の土屋国夫農務官とともに空路チェンマイに赴いた。機上から展望する中央平原の米作地帯は印象的であった。後で調べたところ、中央平原のキャナル（運河）の開発は19世紀後半に行われ、約50年の間にタイの米作面積を倍近くに拡大した。運河が交通、灌漑の両目的に役立ったのである。その後に北部および東北部地域で稲作面積が増えて

いったのには鉄道の建設が貢献している。

また、1960年代に驚異的な発展を遂げた東北部の畑地開発は、アメリカが軍事目的で建設した「友好道路（Friendship Highway）」に拠るところが大きい。輸送手段の整備が農業発展の重要なファクターであることの典型的な実例である。

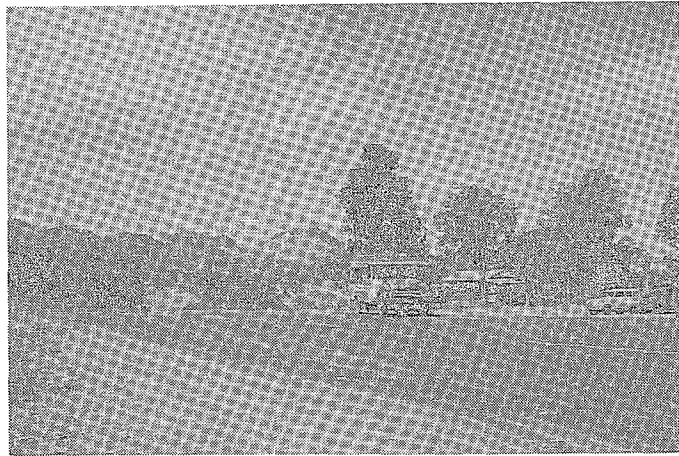
チェンマイを拠点に北部タイの農業を視察したが、中央平原が稲作一辺倒であるのに対し、北部は山あり盆地ありで、その間を中小河川が流れているので、作物の種類も多く、また、米作でも灌漑調節が容易なため、日本、台湾、ジャワなどでみられるような集約的な栽培が行われている。



北部タイの集約稲作

畑作では日本が大豆育種に技術協力しているメジョの畑作試験場や専売公社が技術提供しているタバコ試験場を視察した。

東北タイへは熱研の在外研究員吉目本三男氏の車にアジ研の吉田幹夫氏と同乗で陸路（前述の友好道路）コーラトに向かった。途中では、日本が協力している口蹄疫研究所を視察したり、たまたま通りがかった精米所をみせてもらったりした。またデンマーク政府の施設供与と技術協力によって作られたタイ最初の酪農場の前で車を止め、新鮮な牛乳を飲むなどのドライブをしながら夕刻近くにコーラトに着き、養蚕センターを訪れた。このセンターは日本の機材供与、専門家派遣、タイ技術者（繰糸婦を含む）の日本での研修を組み合わせたもので、センターの規模はおおむね日本の県の蚕糸試験場程度のように見受けられた。場長はかつて日本の蚕糸試験場の場長として我が国蚕糸業界の最高の技術者であった大村清之助博士である。夕食を博士のお宅でごちそうになったが、この地方も北部タイと同じくもち米が常食であるので、夫人が炊飯された米ももち米であった。



開通後、間もない友好道路

バンコクへの帰路はまわり道して山田長政で有名なアユタヤを見物した。このあたりは浮稲地帯であった。浮稲というのは深水田に雨期のはじめに播種（バラ播き）し、増水に伴って茎が伸びる稲で、草丈は4～5メートルになる。その標本は日本でも見ていたが、実際にみるのはこのときがはじめてであった。

浮稲に限らず、熱帯アジアの低地帯での稲作はほとんどが直播で、種を播いた後は自然の生育に任せている。東畑先生が、これは“agriculture”でなく“agrinnature”だと造語されたのを想い出す。先生は日本語でも英語でも造語を得意とされた。

## 黄塵万里

# 中国北部地域の農畜業を食す

大阪学院大学国際学部教授 高橋 藤雄

北京秋天…今は昔の物語…

98年8月末から9月中旬にかけて、海外農業開発協会が中国農業大学の協力を得て実施した中国北部地域の農業開発投資環境調査チームの一員として内蒙古自治区、寧夏回族自治区、甘肅省を訪れる機会を得た。この小稿はその際に見聞した人々の暮らしや農業事情を整理した旅行雑記である。現地調査に出かける時には調査野帳は必携品だが、このたびの調査では人並みにビデオカメラを持参した。これが結構役に立ち、ゼミの教材として学生たちに好評であった。



訪問地域 (①内蒙古自治区、②寧夏回族自治区、③甘肅省)

調査の結果は、「中国北部地域農業

分野での民間投資のポテンシャルティ (内蒙古自治区、寧夏回族自治区、甘肅省、新疆ウイグル自治区)」と題し、海外農業開発協会が2月1日、3日に大阪、東京で企業関係者等を対象にしたセミナーを開催したおりの資料にまとめているので詳細はそちらに譲る。

北京は6年ぶりであった。84年の夏、国際協力事業団が派遣した調査団の一員として訪中したのが私の中国初体験である。そのころは沿岸地域の経済特区における外資導入が緒についたばかりで、投資関係の法規は未整備であり、窓口となる担当省も手さぐり状態であったように見受けられた。北京の街中も古い家並みが残り落ち着いた感じであった。人々の移動手段は自転車が主で朝夕ともなれば名物の自転車のラッシュが見られた。また、人民服がハバをきかせており、伝統的に流行の先端を行く上海でちらほらカラフルな服が目につくという状況であった。

同年9月新疆ウイグル自治区に調査に入ったが、この時には国内旅行証が必要であったし、外国人の訪れることのできる場所にも制限があった。招待所が唯一の宿泊可能な所でウルムチには観光客用のホテルなどなかったように思う。それから8年後の92年の夏、FAOが主催す

る農業統計関係の会議に出席のため北京を訪れたが、この時には市内いたるところ建設ラッシュで騒然としていた。丁度、東京オリンピック前後の東京に類似した様相であった。

今回の北京訪問で一番驚かされたのは、あの北京秋天といわれる秋の抜けるような空の青さが見られなかったことである。

北京空港に降り立った時に仰いだ空はスモッグがかかったような曇りだった。今日は天気が悪いのかなあという程度でこの日は気にもとめなかったのだが、翌日の朝になっても状況は同じ。ああこれは天候のせいではなく、うわさに聞いていたスモッグのせいだと遅ればせながら合点した次第である。出迎えてくれた中国農業大学の王講師の話だと、最近ではほとんど青空を見ることができず、ゼンソクなどの病気が増えるなど、様々な問題が出てき、政府も本格的な対策に取り組みは始めているとのこと。しかし、秋の入り口でこれでは暖房が必要な晩秋から冬の時期は、石炭が主力熱源である実情を考えると夕方3時ごろにはライトが必要になるだろうと想像された。街も一変していた。近代的な高層ビルが林立し、アジアのどこでも見られる都市景観になっていた。ただ、これらビルの中には全体の輪郭が凸凹した個性的なものが結構あり、これらの外面の窓拭きはどうするのかと勝手に心配している。自動車の数の多さも他の国の主要都市と同じで、自転車は主役の座を降りている。主要道路には従来のまま自転車専用の車道が設けられているが、将来もこれら車道は今のままの形で生き残っていけるのであろうか。そう思わせるほど、近年の自動車の増加ぶりはすごい。市民の服装は人民服を見ることが全くなくなるほど変化した。15年ほどでこんなに変化した国を私は知らない。

### 中国農業大学の先生方

前述したように今回の調査は中国農業大学の協力を得て行われたが、その中心となったのは李里特副学長で、現地調査には若手の二人の研究者である伍建平副教授と王之盈講師が参加した。

中国農業大学は、北京農業大学と北京農業工程大学の研究教育部門を統合して1995年に創られた大学であるが、現在では農学の単科大学として中国第1位の座にあるといつてよい。学术交流、留学生交換にも大変積極的で多くの研究者、学生を海外に派遣するとともに受け入れも行っている。研究調査活動においても外国の諸機関との提携に熱心で驚くほど開放的である。このような姿勢と努力は近い将来の発展を期待させる。キャンパスは旧北京農業大学と旧北京農業工程大学の二つに分かれており、私たちは後者、市北西部にあるキャンパスを訪れた。ここは大学街の中にあり緑の多い環境で、他の大学と同じようにキャンパス内には研究棟、教育棟の他、教員、学生の宿舎、食堂その他生活厚生施設が配備されていて、共同体のような生活が営まれている。ゲストハウスも完備されているが今回は宿泊するチャンスはなかった。

中国の大学、試験研究機関にとって最近の予算面での合理化は相当厳しい様子で、積極的な自助努力、例えば、民間との提携により研究開発費を調達するなどが求められているようである。また、このことは行政機関全体にも及んでおり、合理化と構造改革の波がおしよせている。

様が地方の省を訪れた時にも見聞された。

李里特副学長は食品化学を専門とする学者で、北海道大学で博士号を取得しただけあり日本語には堪能である。王講師は島根大学に一年間特別研究員として在籍していたが、わずかの期間に驚くほどの日本語を身につけていた。専門は農村社会学である。伍副教授は農業情報学を専門としているが、日本語よりは英語の方が得意で、私たちとの意志疎通は英語によった。若い中国の研究者との接触はこれがはじめてであったが、大変な能力と人柄の良さを旅のなかで知ることができた。経済の改革・開放政策に転じてほぼ20年、新しい世代が着実に育っているようである。

### 内蒙古へ

8月31日夕刻、内蒙古自治区の首都フフホトへ向かう。一行は、団長の小林専務理事、井佐職員、王講師それに私の4人である。飛行時間は北西へ向け約1時間。フフホトは周囲を山に囲まれた盆地に位置している。ここでも石炭燃料の影響か空はどんより曇っている。街の中心地にある昭君大酒店に泊まる。ホテルの名前「昭君」は前漢の時代、匈奴の王を慰撫するため送られた中国四大美人の一人王昭君の故事を冠したものである。ホテル内の会議室の壁画に往時を偲ばせる姿が描かれている。

フフホトの街は蒙古らしい特徴を備えているのではないかと期待していたが、中国の他の都市とあまり変わらず雑然とした感じである。ただ、看板などはモンゴル語と漢語が併記されていて長城の外へ来たことが実感された。

日中の日差しはきつい、夕方ともなれば気温は下がり涼風が心地よく、つい散歩に出たくなる気候である。街中の屋台では羊肉のくし焼き（シシカバブ風）が盛んに売られている。人々は屋外の椅子に腰を下ろしのんびりと雑談しながらこれを食べているという風景が目につく。近くのレストランで食べた羊肉のシャブシャブは絶品であった。羊肉そのものの旨さは他には比肩できない。牛肉、豚肉、魚貝類が並べて置いてあり、どれを選んで食べても自由なのだが、問題なく羊肉に軍配があがる。シャブシャブ用スープは2種類ある。何も入っていないものと香辛料入りである。香辛料入りスープは一般的に食習慣により大きな違いが表れるが、私にはやや辛過ぎた。

旅の楽しみは食にありとよくいわれるが、私も食の趣味が強い。内蒙古での期待は、羊肉と馬乳酒であったが羊肉には十分満足した。馬乳酒の方はまろやかな焼酎の味でアルコール度が高く、酒にあまり強くない私ではその味を堪能するまでには至らなかった。酒席といえば、これまで中国へ行く時は乾盃、乾盃が苦痛の種であったが、昨今は少なくとも北京等ではその風習が少なくなりつつある。これは政府も政府関係の会合での行為をできる限り慎むよう再三にわたり指示していることと、それを許さない経済行為のシビアーさが浸透してきたことと関係しよう。しかし、こちらではまだ盛んなうえ、旭鷲山に似た体格の良い人達の強さときたら人間とは思えない。彼等は飲みはじめたら飲みつづけるまで飲むということである。

## 風渡る草原と草原の開発

内蒙古では自治区の農業庁、教育庁などを訪問した。広大な草原を基盤にこの地の主力産業は牧畜であることはいうまでもない。政策の重点も牧畜の振興におかれている。そのいくつかを紹介してみよう。

### 1. 種の改良

家畜（羊、牛）の品種改良に加え、牧草についても生産性の高い牧草の導入を検討している。

### 2. 集約的、効率的畜産経営の確立

牧柵を設けることによって放牧地のローテーション化を図り、放牧していない牧草地に施肥をするなど牧養力の回復に努める。また、生産性の高い牧草の導入により、乾草の生産を行い冬場の飼料を効率的に確保する。

### 3. 畜産物の加工・流通の近代化

食肉、牛乳、乳製品の産地処理技術の改善により畜産品の品質向上を図る。また、保冷車や保冷施設の整備によって北京、天津への流通問題を改善する。

これらの取り組みは今のところ自治区だけでは実現が困難な状況にあり、特に、外資による優良牛、優良牧草種の導入や食肉加工、牛乳、乳製品工場の建設、ハイキューブ生産分野での協力が期待されているようであった。

内蒙古の草原は、厳しい自然環境の下で生態系の調和を保ちつつ存在しているもので、一部の地域では過放牧による草地の劣化、砂漠化が進んでいる。また、人口増加による食糧増産圧力から草地の畑地化が行われている所では、風や土壌条件の悪さ等により耕作放棄が増え、砂漠化を招くという問題がでている。私たちは中国科学院草原研究所を訪ね、数時間にわたり廬欣石所長とこれらの問題につき意見を交わしたが、結局は同所長も指摘しているように草地には基本的には草を栽培するという考えで裸地化の状態になるのを避けつつ、草の改良（天然草地の改良、人工草地の創設）と利用の効率化を図っていくことが重要なのではないかと思われた。

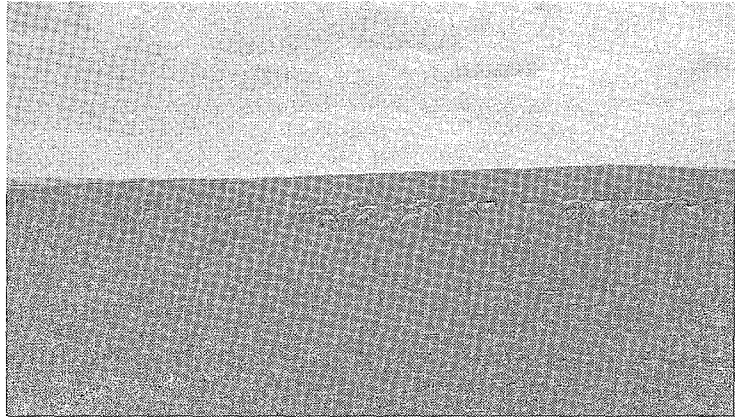
フフホトから約2時間、武川盆地をぬけて蒙古の大平原につながる草原に立った時、もっとも穏やかな季節であったにもかかわらず、草原を渡る風はかなり強く油断をすれば風浸、風触が一気に進みそうである。

それにしてもこの広大な草原は何なんだろうか。身も心も解き放ってくれる。かつて、元の時代、フビライは一年のうち夏場は草原のパオで過ごし続けたといわれるが、事の真偽はともかく、その気持は理解できる。異邦人の私たちでも、この自然に触れたら身をまかせておきたいと思うのだから。



## 内蒙古の大草原にて

平に遠雷の響 天地に驟雨の暮  
白く連なるバオの群 草原に彩りをなす  
牧人ひとり座して 煙草をくゆらす  
悠々の時流れ 一幅の絵となれり



360度地平線 羊が草を喰んでいる

## 銀川へ

寧夏回族自治区の区都銀川は甘肅省を流れている黄河が大きく北の方へ蛇行している地域寧夏平原の中部にある。別称は鳳凰城。11～14世紀に西夏王朝が栄えた歴史で知られている。寧夏の黄河流域は雨量は少ないが、黄河の恵みをたっぷり受けて豊かな農業地帯を形成している。

一方、南部の山岳地帯は中国でも最貧の地方である。現在、島根大学のチームによる農村開発協力や、JICAの森林害虫対策プロジェクトが実施中であり、貧困の克服に向けた協力が行われている。

回族はその名のとおりにイスラム教（回教）を信仰する人々である。北京から銀川へは飛行機で約一時間半、朝に出発し10時に到着する。私たちは市中心部にある虹橋大酒店に泊る。丁度、当自治区と友好関係を結んでいる島根県の代表団の一行が投宿していた。

銀川の街は古くから河西回廊の中の農産物の集散地として重要な位置にあったし、今日でも活気があふれている。小麦、トウモロコシなどの穀類だけでなく野菜も豊富、また、りんご、ぶどう、洋なしなど美味な果物の生産も多い。市内の市場を見学したが、じゃがいもなど1個300gもありそうな大玉がごろごろしていた。葉もの野菜も多くの種類が並びみずみずしい。りんごを買って食したが、日本のように品種改良が進んでいないにもかかわらず、自然のおいしさが口の中へ広がった。

食べものの話で恐縮だが、当地では小羊の肉、ぎょうざ、そして小麦産地を背景にした<sup>ラーメン</sup>拉麵\*がいち押しである。拉麵は牛肉拉麵など肉類が入ったもののほか、じゃがいも拉麵というものがあり、これがチーム全員の意見として最高のものであった。じゃがいもを千切りにして油でさっといためて拉麵の上にのせただけだが、じゃがいもそのものが大変おいしく、拉麵との調和も良い。ぎょうざは主食として食べる。これは中国の西城、華北では普通で、日本のように副食ではない。また、焼くのではなく湯の中を通して食すが、水ぎょうざとも異なる。一人前20個位でただ同然の値段である。有名な山東ぎょうざ店に行ったが、店内では、10人ほどのぎょうざ職人が流れ作業で皮づくりから、具入れ、湯通しを行っているところが見学できる。

\*ラーメンの語源は中国の「拉麵」または「老麵」で、本来は引き伸ばして製する麵を意味する。しかし、数年前から日本のラーメン人気の影響してか、中国各地の中小食堂の料理メニューに「拉麵」の呼称が登場してきている。

### 企業家の芽生え

銀川では新たな企業家の息吹きを感じた。私たちはここで4つの事業を見学する機会が得られた。いずれも地域の特性を生かした先進的なプロジェクトであるが、なににもましてこれらの事業を率いる経営者のセンスには感心した。

最初に訪れたのはカシミア工場である。1988年に設立されたこの会社は現在では年間4,000万ドルもの外貨を獲得している。カシミア原毛の産地として名高い内蒙古のアウシヤンノクから100kmという立地を生かし、良質の原毛を確保しスイスから紡錘機械類を輸入して毛糸、織物の生産を行っている。

次の訪問地は郊外40kmに位置しているワイン用ぶどう園1万ムー（1ha=15ムー）を目標に開発を進めている農園である。半乾燥地というよりは砂漠に近い荒涼たる草原を切り開いてつくられた農場は、まだ植栽後1～2年の樹が多く、収穫はこれからである。河西回廊は古来ぶどうの栽培が盛んで、その点では適地といえる。問題は水である。地下水は豊富とはいえず、黄河の水に頼ることになる。黄河からの灌漑用運河は自治区が建設していて、農業用水の利用者はその運河からポンプアップにより取水を行い、自前の用水路を使って各圃場まで導水するという方法である。黄河の水は栄養分に富んでいて丁度育樹期のぶどうにとっては大きな恵みをもたらす。灌漑が土壌改良の役目も果たしているのである。

9月6日には銀南地区の呉忠市にあるダチョウ養殖会社を訪れた。この会社は乾燥気候でダチョウの飼育に適した条件を生かし、アフリカ、オーストラリアからダチョウを輸入し養殖を行っている。1匹から年間25匹位のヒナが得られるように繁殖のスピードが速いこと、また、増体の度合も高く年間120kgも体重が増えること等の特徴に着目し、5年間で種鳥1万匹、販売鳥20万匹を確保しようという大規模な計画を進めている。

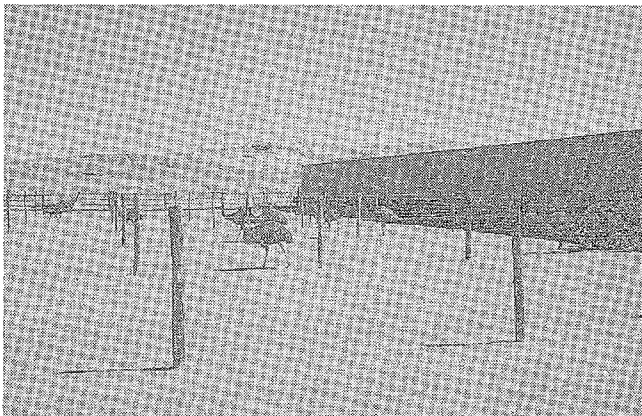
主に、肉の生産を目的としているが、もちろん皮の加工にも取り組んでいる。タンパク含量が多く脂肪が少ないので健康食品として売り出しているだけあって、あっさりした味であった。

肉の販売先は国内へ40%、外国、特に近隣のイスラム諸国へ60%となっている。一方、皮の方はご存知オーストリッチとして高級皮製品の材料になる。当会社はハンドバッグ、ベルト等の製品についても製造は始めているが、現在のところまだそう多くはなく、原皮の販売が中心のようである。そのほか毛、卵も販売していると聞いた。

自治区当局はこのプロジェクトに大きな期待を寄せており、いろいろなインセンティブを与えている。例えば、ダチョウは運動が必要のため広大な放牧地を確保しなければならないが、土地（砂漠であるが）を無償で供与したり、税も3年間免除、資金も年間100万元（訪問時1元=14円）を2年間提供するといった具合である。しかし、どんなに優遇されても、商品の販売面における将来性と経営者に恵まれなかったら事業は成功しない。その点、この会社は若い41歳の才能ある経営者を得たことが幸いしている。リスクのないところ利益なしというような大胆なチャレンジ精神にあふれ、マネージメントも徹底した合理主義に貫かれている。官側からの手厚い保護があると、得てして天下り先の温床となり、それが企業経営を親方日の丸的（中国では「親方五星紅旗」とはいわない。「大鍋飯」の表現が一般的で、親方日の丸のほか悪平等の意味にも使われる）な厳しさのないものにしがちだが、そこは一線を引いているようである。対面していて非常に爽やかな風が吹くのが感じられた。新しい企業人の誕生を見る思いがした。

呉忠市から銀川への帰路、肉牛飼育牧場に立寄る。こちらは93年に設立された会社で、現在は600頭の肉牛を肥育している。将来は2,500頭まで拡大する計画という。この牧場の特徴は、自前の牧場における肉牛肥育に加えて、屠畜場および食肉加工場の計画をもつ点であろう。これらの施設を利用し、周辺の農家との連携により年間2万頭程度の屠畜を行い食肉を生産しようというものだが、当地における畜産物の加工分野は一般的にみればこれからの段階にあるといえる。特に、牛肉、牛乳、乳製品関連は投資対象として可能性が高いように見受けられる。ただし、外資の場合は投資目的をはっきりさせておく必要がある。

これらの企業には共通点がある。まず第一に乾燥地という自然条件または黄河の恵みを生かし個性的で競争力のある製品の開発を行っていること、二つ目は経営者がいずれも若く、企業家のマインドを持っていることである。いわゆる郷鎮企業や国営企業が困難な経営に直面している中で、経営者の手腕によっては優良な私営企業が育つことを示唆している。

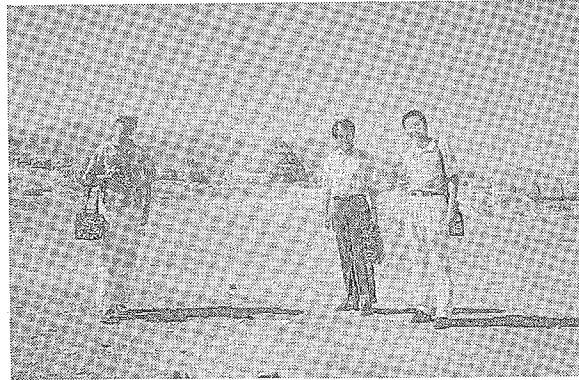


ダチョウ飼育場

### 塞上の江南の風景

寧夏はその昔、緑豊かな土地で江南\*にも並ぶ景観を呈していたという。今日では黄河流域の灌漑地は農作物や果樹に覆われグリーンベルトを形成しているが、一步それを外れれば半乾燥の砂漠地帯が延々と続く。見渡す限り草木とて一本もなく、ここに西夏王朝がどうして栄えたのであろうかと疑問に思うほどである。自治区政府の重点施策のひとつは、このような砂漠化に歯止めをかけ緑化を進めていくことである。そのため、植林、果樹栽培等が奨励され、この分野での投資には手厚いインセンティブが設けられている。塞上江南の風景の再現は簡単ではないであろうが、その努力が実を結ぶよう期待したい。

\*南部に位置する江蘇省、浙江省は昔から中国の穀倉地帯で、この地域を“江南”と呼んでいる。



9つの西夏帝王陵のうち最大のもの。  
(左端筆者、中央小林専務理事、右端王講師)

### 銀川から蘭州へ

甘肅省蘭州へは夜行寝台列車で行く。初めて寝台列車に乗るのでやや不安であったが、4人一室のコンパートメントで思っていた以上に快適であった。薄明かりの中で黄土高原を見る。早朝、蘭州に到着。蘭州市は甘肅省の省都で人口250万人、高土高原に囲まれた盆地に形成された細長い街の中央を黄河が流れ、黄河上流最大の水陸交通の要衝になっている。シルクロードの中国側の基点であり河沿いの公園に三蔵法師一行の銅像があるなど、いかにも西城の風情がある街である。



蘭山からみた段々畑

私たちは早速、蘭山に登る。標高2,200mの頂上まで車で登れる。ここからの眺めはすばらしい。黄河をはさんだ長い盆地に街が広がり、街を抱くように黄土の山々が連らなる。西方のわずかに開けている方角は敦煌から天山南路へ通じる道が続いているのであろう。良く見れば、これらの山々には階段状の切り込みがある。なんと段々畑である。耕して天に昇るとはこのことか。しかし、ほとんど緑はない。乾ききった大地である。

#### 蘭山にて

黄土高原の峰々 薄暮の中に横たわり  
西方微かに 絹の道を望む  
僅かな緑の縁どりを得て 黄河は流れ  
その恵み 天下の人々を潤す



蘭山からみた山並み

### 痩せ地と厳しい自然条件

蘭州の第一印象はなんと荒漠とした所で農業など不可能ではないかというものであった。しかし、200kmほど離れた白銀市への小旅行によってこの印象は少し変わった。黄河沿いに道をとったが、ここでも黄河の水を利用できる土地は野菜、トウモロコシ、小麦などが栽培されている。寧夏と違うところは、ソバ、粟、ヒエといった痩地に育つ作物が多く目についたことである。

甘粛省は広大な面積があり省内の自然条件も様々である。東部の黄土高原は畑作、南部の亜熱帯地域では油糧作物、果樹等の経済作物、河西回廊\*では食用作物、大宗を占めるその他の砂漠、草原では放牧が行われている。

厳しい自然条件の下での農牧業であるから、この地に適した作物の開発研究には省政府も熱心に取り組んでいる。そのひとつは高品質小麦品種の開発改良である。イタリアからいくつかの品種を導入し適地性を研究している。また、標高の高い草原地帯でのヤクやチベット羊の効率的な飼育技術の開発とそれらの毛、皮、肉の加工技術の向上にも努めている。観光客の増加に伴い、観光農園にも力を入れている。

さて、白銀市であるが、市の郊外平川地区に工業団地を造成し工場誘致を図る計画を立てたものの、ほとんど進出する企業もなく広大な造成地が遊んでいる状態である。そこで、ここにグリーンハウス中心の高度集約型の農業を育成しようと図っており、外資も含め投資を期待していて私たち一行も案内された。日本の企業関係者も視察に来ているようだが、事業が開始されたプロジェクトは見当たらない。

\*甘粛省西北部の祁連山以北、合黎山・竜首山以南の地を指す。黄河の西にあるのでこの名がある。「河西走廊」ともいう。東西約1,000km、南北100~200km、平均海拔1,400m。

### 蘭州拉麵

蘭州拉麵を食べに大王拉麵店へ行く。麵は小麦の産地であり旨い。羊肉、牛肉、じゃがいも、鶏肉がそれぞれ別の小鉢に盛りつけられスープも異なる。4種の味が楽しめる仕組みである。これに粟のドブクロがついて一セットである。銀川の拉麵よりは品良く盛りつけられているが、味は野生的な銀川の方が私の好みに合った。暑い土地柄だけにウリ類が美味である。さわやかなメロンに似た味のウリは我がチームの人気をひとり占めした。このジュースは数杯飲んでもあきない。

ハミウリはもっと西方で産するが、この地方ではどこでも類似の味が楽しめる。

蘭州も盆地のためかスモッグがひどい。蘭州市内は黄河により分断されていて、黄河にかかる橋は清代に架けられた黄河第一橋がガイドブックに載るほど有名である。ご多分にもれず市内の渋滞はひどい。自動車といえば、運転マナーは相当なもので、白銀市へ出かけた時は生きた心地がしなかった。120kmものスピードで追い越し競争である。対向車や牛馬車、歩く人などなんのそのひたすら爆進する。自動車だけでなく、一般に交通ルールはあってなきがごとく私たちの目に映る。帰路、自転車に相乗りした若者が突然前方にふらふらと乗り出してきて危うく轢きそうになる。当方の不注意は何もないのだが、どっと周辺にいた人々に囲まれて難渋した。

街を散策していて気のついたこと四つ。一つは人民服を見かけなくなったこと。二つ目は、携帯電話（中国語では「大哥大」）の普及がすさまじいこと。電話線を敷設する必要がないためやたらと目に付く。三つ目は、カップヌードルの人気。朝からカップヌードルを食べている。空港のレストランでも人気ナンバーワンはカップヌードルである。現在、最も人気のあるのはカップ式の台湾系「康師傅」で、次にこれも台湾系の「統一麵」。特に子供たちの間で人気がある。四つ目は、「歌舞庁」の賑わい。この歌舞庁は入ったことはないが、当地の識者？の説明によると読んで字のごとくカラオケが唄え（歌手が入っているところもある）、ダンスができる店の意味だそうだ。いずれも人々の生活の変化を表すもので、ちょっと気になる光景であった。

### 北部地域発展の可能性は

沿海地域の飛躍的な発展に比べて北部地域を含む内陸地域の立遅れは否めない現実である。開発政策の重点が今後これらの地域に置かれても、その後発性、地理的、資源的な不利性を克服するのは容易ではなかろう。しかし、私が持っていたイメージ、すなわち、化石のように変化していない街と人々というものとは様相を異にしていた。そこは大きく変化しつつあるのである。北部地域の開発にはある種の逆転の発想が必要かも知れない。それは古くからの文明の交流ルートの再認識から始め、関内だけに片寄らない、中央アジア、ロシア等内陸への視点を加えた二方面の戦略を構築していくことではないか。もちろん、そのためにはこれらルートのインフラ整備が重要なのはいうまでもない。道路、鉄道は着実に整備されつつあり、可能性が高まってきている。

現代のシルクロードの再構築、そこに夢を現実の発展に結びつけるカギがあるのではないか。次の機会にはぜひカシュガルからトルキスタンを訪れ、現代のシルクロードの交易事情を見聞したいものである。

# 海外農林業開発協力促進事業

## 民間ベースの農林業投資を支援

(社)海外農業開発協会は昭和 50 年4月、我が国の開発途上国などにおける農業の開発協力に寄与することを目的として、農林水産省・外務省の認可により設立されました。

以来、当協会は、民間企業、政府および政府機関に協力し、情報の収集・分析、調査・研究、事業計画の策定、研修員の受入れなどの事業を積極的に進めております。

また、国際協力事業団をはじめとする政府機関の行う民間支援事業(調査、融資、専門家派遣、研修員受入れ)の農業部門については、会員を中心とする民間企業と政府機関とのパイプ役としての役割を果たしております。

## 海外農林業開発協力促進事業とは

多くの開発途上国では、農林業が重要な経済基盤の一つになっており、その分野の発展に協力する我が国の役割は大きいといえます。そのさい、当協会では経済的自立に必要な民間部門の発展を促すうえで、政府間ベースの開発援助に加え、我が国民間ベースによる農業開発協力の推進も欠かせないとの見地から、昭和 62 年度より農林水産省の補助事業として「海外農林業開発協力促進事業」を実施しております。

### 1. 優良案件発掘・形成事業(個別案件の形成)

農業開発ニーズなどが認められる開発途上国に事業計画、経営計画、栽培などの各分野の専門家で構成される調査団を派遣して技術的・経済的視点から開発事業の実施可能性を検討し、民間企業などによる農林業開発協力事業の発掘・形成を促進します。

### 2. 地域別民間農林業協力重点分野検討基礎調査(農業投資促進セミナーの開催)

農業投資の可能性が高いと見込まれる地域に調査団を派遣して、当該地域の農業事情、投資環境、社会経済情勢を把握・検討し、検討結果に基づく農業開発協力の重点分野をセミナーなどを通じて民間企業に提示します。

### 3. 海外農林業投資円滑化調査(情報の提供と民間企業参加による現地調査)

海外投資事業に関心を持つ企業の投資動向アンケート調査および投資関連情報の整備・提供を行うとともに、主に海外事業活動経験の少ない企業などを対象に、関心の高い途上国へ調査団を派遣し、当該国の農業開発ニーズ、農業生産環境などを把握します。

相談窓口 (社)海外農業開発協会  
第一事業部  
TEL : 03-3478-3509

農林水産省  
国際協力計画課事業団班  
TEL : 03-3502-8111 (内線 2849)



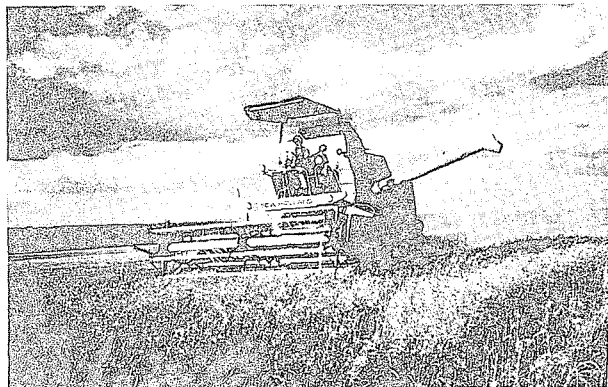
総合農業雑誌

# アグロ・ナッセンテ

AGRO-NASCENTE

ブラジルで発行されている

日本語の農業雑誌!!



南米の農業が

次第に注目されてきました。

従来のコーヒー、カカオ、オレンジ、大豆などの他に、熱帯から温帯までの多くの作物が生産されるようになったからです。

南米の農業情報は、日本語唯一の専門誌「アグロ・ナッセンテ」誌で—

EDITORIA AGRO-NASCENTE S.A.  
R. Miguel Isasa, 536 - 1º - S/ 13, 14, 15  
CEP 05426 São Paulo Brasil

(日本でのお申込み先)

日伯毎日新聞社東京支局  
東京都港区三田 2-14-7  
ローレル三田503号  
Tel.: 03(3457)1220

海外農業開発 第247号

1999. 2. 15

発行人 社団法人 海外農業開発協会 春名和雄 編集人 小林一彦

〒107-0052 東京都港区赤坂8-10-32 アジア会館

TEL (03) 3478-3508 FAX (03) 3401-6048

定価 300円 年間購読料 3,000円 送料別

印刷所 日本印刷(株)(3833)6971

海外農業開発

第 247 号

第3種郵便物認可 平成11年2月15日

MONTHLY BULLETIN OVERSEAS AGRICULTURAL DEVELOPMENT NE